

山崎郷土叢

NO. 106
17.9.11
兵庫県宍粟市教育委員会
地域教育課内
山崎郷土研究会
電話62-2000

【宍粟市誕生に寄せて】

宍粟市誕生に思いを馳せて

宍粟市文化協会会長（波賀） 大成みちよ

昭和の激動の中での合併から約五十年!!

平成の大改革の潮流に沿って大合併が大きな話題となつている今日。私たちの郷土（宍粟）では、幾多の紆余曲折の中、賢明な指導者の説明を聴き、次第に納得し賛成にこぎつける事が出来まして、平成十七年四月一日宍粟市誕生となりました。

私たちの祖先が育て継承してきて下さった諸々の文化は地域の宝であります。

その土地にしかない重要な名勝史跡、伝統芸術等、先人たちの歴史物語は、それぞれの地域でしっかり伝承しなければならぬと思います。そして将来は四町の宝は宍粟市民の宝として大事に守り続ける事が大切な責務だと思います。

宍粟市誕生までの合併問題について少し振り返ってみたいと思

目次

宍粟市誕生に寄せて

宍粟市の誕生に思いを馳せて

御形神社の祭神

郷土史研究の広がり願って

宍粟市の誕生と私たち

大成みちよ

伊藤 弘之

石原 親雄

森本 一二

【地域史随想】

高貴の出自につながる人たち（二）

明治二十七年宍粟からの開拓団

篠津原野への挑戦

昔楠木、今は乃木

山崎町歴史街道（十）

事務局だより

宇野 正磯

鎌田 裕明

浅田 耕三

会報部

1

5

11

18

19

20

います。

平成十四年頃に、はじめて合併についての話題をあちこちで耳にする様になりました。やがて自治会別に、又各種団体別にも合併についての懇談会が実施されました。町民の関心は、はっきりわからないものの、直接自分たちの生活に関係があるものと信じ「合併したらこれから先どうなるのであろうか?」「きっと地理的に不便になるであろう。」「何故、今、合併なのか?」「合併によるメリット、デメリット?」等、色々と意見が続出したもの

です。

しかし、町広報等で合併の動きを知る事が出来ました。その間、「住民アンケート調査」「中学生へのアンケート調査」「町在住の満十八歳以上の人たちに無作為調査」等々多方面に亘って綿密に進めて下さいました。その甲斐あって今日、ここに宍粟市が誕生したものと思います。

今後は宍粟市民が一体となり、お互いの連携を深め、或る時は他市町の活動にも関心と視野を広め、宍粟市民が活力あふれる様に、温故知新に誠心誠意をつくす事が大事な課題かとも思います。

御形神社の祭神

宍粟市文化協会副会長（一宮）伊藤弘之

継続した活動により百号を越す会報を発刊されておりますことを心よりお喜び申し上げます。長年のご努力に敬意を表する次第でございます。

私達、一宮文化協会の会報「山の灯」は一昨年、五十号記念号を発刊しましたが、この倍ですから素晴らしい事です。おめでとうございます。

私は文化活動として、つちのこ美術館という名の、畳のイ草を使った干支作りをしています。先生なしの我流です。この干支を氏神様である御形神社に毎年展示をしています。今年で干支が一

巡し、全部展示しました。

私は以前、御形神社の楽人として、春と秋の祭には、約二十年間上がらしていただきました。この御形神社を紹介します。

御形神社は葦原志許男神、又は大国主神と申します。志許は元氣のある、武勇に優れた神威嚇たる神という意味だそうです。この神様は三方の高峰山に居られて、三方の里や、但馬の一部を開拓され、蒼生を定められて今日の基礎を築いて下さいました。しかしその途中、天日槍神が渡来し国争いが起こり、二神は黒葛を三條ずつ足につけて投げられ、葦原志許男神の黒葛は、一條は但馬の気多郡に、一條は養父郡に、そして最後はこの地に落ちたので三條（三方）といい伝えられております。天日槍神の黒葛は全部但馬の国に落ちました。そのところの出石にお鎮まりになり、今に出石神社と申します。やがて葦原志許男神は事を了えられて、この地を去られるに当たり、愛好された杖を形見として、この山頂に刺し植えられ、所在の標とされ、「形見」は形見代、御形代より起こりました。その刺し植えた所に社殿を建ててお祀り申したのが社の創祀です。奈良朝の宝龜三年（七七二）山頂より当地へ移した「夜の間の杉の伝説」の中に伝えられており、今の御形神社は、大永七年（一五二七）の建立で、昭和四十二年に国の重要文化財に指定され、四十六、七七年に解体復元され現在に至っています。

最後になりましたが、山崎郷土研究会に皆様方の益々のご活躍と、ご多幸を心よりお祈り申し上げます。

郷土史研究の広がり願って

宍粟市文化協会副会長（千種）石原 親雄

山崎郷土研究会は、昭和八年一月「宍粟郷土研究会」として発足し、戦前、戦後の混乱期のため中断されていたが、関係者のご苦労と努力によって、昭和三十三年三月会報第一号の発行と共に力強く再出發され、以来幾度かの改変がなされて、現在の山崎郷土研究会に続いている由、平成十四年九月には、意義ある会報百号の発行を迎えられるなど、編集者のご苦労をはじめ、会員の方々の地味ながらこつこつと、史実の研究と調査を積み重ねた結果であったと思います。それだけに、全ての会報は貴重なものであり、興味深いものだと思います。

宍粟市内には、文化団体をはじめ、いろいろな団体、サークルがあります。然し夫々の活動と円滑なる運営を図る上に欠かせないのが、良きリーダーに恵まれることだろうと思います。会報、会誌は会員相互の連絡はもとより、調査研究と事業を推進する上において更に市民の皆さんに伝え知って貰うための大きな媒体であると思います。

一つの団体の運営と活動を推進して行く上において、最も大事な人間関係、意見の相違等の調整に努めながら、幾多の障害を乗り越え、会を纏め継続していくことは、なかなか容易ではなく、大きなエネルギーが必要であると思います。

「継続は力なり」と云う言葉がありますが、本会の今までの歩み

を知る時に、七百名近い会員を擁する大きな団体に成長飛躍されたことは、至極当然であったと思います。

さきに宍粟市の誕生を見て、行政関係の組織改正がありました。各種団体においても、好むと好まざるによらず、その運営活動は、変わり変わって行かなければならないと思います。

図体が大きくなり、小回りの出来ない故のマイナス面が出ないことを願うと共に、この機会に発想の転換を図られ、より地道に地域の文化の伝承と、歴史研究に取り組み、更なる飛躍を期待して止みません。

宍粟市の誕生と私たち

山崎郷土研究会会長 森本 一二

平成十七年四月一日、山崎町と郡北三町が合併して宍粟市をつくりました。

新しい宍粟市になると、私たち山崎郷土研究会は、どのように変わるのでしょうか。そして、その事にどのような対応をすればよいのでしょうか。

これは、私たち会員みんなの思いであります。まだ何も外部からの指導や働きかけはありません。そこで私たちは自主的に、新しい道を考えねばなりません。

その為にはまず、本会の会則と、長い歴史的な経過を見直すことが大切です。

本会は、山崎郷土研究会を名乗っていますが、その研究と活動の範囲は旧町内に限ってはいませんでしたので、その名称を変える事はありませんが、また反面「山崎」の名にこだわる必要もないものと考えています。

また、本会の目的は「文化の保存維持および調査研究をなし、地方文化の振興を図る」ことに置いていきます。

したがって、従来もそうでありましたが、町内に限らず、地方（郡内外）の史蹟や産業についても、研究や発表が見られました。このため、目的面から言えば何ら、合併による支障はなく、研究を志す人と、その領域の広がりをこそ、期待すべきであります。

しかしながら、体制的に困難な点の生じるのも止むを得ないことです。

その一つは、第六条の役員であります。これによると、町長を名誉会長に据え、二名の顧問は、教育長と文化協会会長に委嘱して来しました。

しかしながら、名誉会長や顧問の委嘱など、行政体の変更による規約改正等は、今後の状況を見ながら検討を加えていかなければなりません。

ただ、今年には顧問に山崎文化協会会長様をお願いし、御了承を得ています事を報告します。

次に本会の歴史であります。その起源は古く、昭和八年（一九三三）宍粟郷土研究会として発足しましたが、戦中、戦後の混

乱期には活動の中断もあり、休刊状況が続きましたが、昭和三十三年に再発足し、以来盛会を来し、会員も一時は七百名に達し、会報は今回で百六号になりました。

私たちは、先輩各位の努力、研鑽の跡を継承し、初心に返り、宍粟郷土研究会にと発展することを希求しますが、まだそのような働き掛けには至っておりません。

勿論合併しました旧三町には、名称こそ異なっても、本会と目的、性格の類似した団体、グループが活躍されているのは衆知の事でありますので、お互いに呼び掛け合ったりして、より大きく、強力に研究の輪をつなぎたいと念願しているこの頃であります。どうか、会員各位

のご助言とご支援をお願いいたします。

また、今回、宍粟市文化協会の大成会長様、伊藤・石原副会長様には本会報にご登稿いただき、誠にありがとうございます。ございました。

今後、全市的な活動の広がりのためよろしくお願いたします。

贈答品・記念品・名入タオル・ギフト全般
まどか
ギフトショップ
ロワール 円



宍粟市山崎町中井105-1(ジャスコ南)
TEL0790(62)8726
FAX0790(62)9681

ご用命は通話無料のフリーダイヤルでどうぞ

0120-338726

【地域史随想】

高貴の出自につながる人たち (二)

放手形請取一札

庄屋 善四郎殿

宇野 正 碓

中原村二居申候木地挽(中略) 尤当村之内二禅宗實際寺旦那二相成申候(後略)

播州宍粟郡九(公) 文村

庄屋 善四郎

五、宍粟郡阿舍利に來た人

木地師の人生は移動の連続であり、そこには安樂な人生を楽しむ余裕はなかった。宍粟郡で小椋仲藏氏の回顧談を見てみよう。

同氏によると、現在は一宮町河原田の阿舍利に定住して畑作と山仕事に従事しているが、当郡に來たのは忠兵衛からと伝えていて、江州筒井帰雲庵、智淨発行の寛政十二年(一八〇〇)庚申四月付けと文政十年(一八二二)九月の宗門手形をもっている。

文化十一年(一八一四)まで因州八頭郡中江山原村に居住(仲藏所有若桜宿寺院受取帳) ついで文化十二年(一八一五)には公文村に移ったことが知られる。

放手形によると「仲原村山に居申候木地挽勘兵衛家内六人、忠兵衛家内三人、庄左衛門以上十三人之者共宗門禅宗龍徳寺旦那二粉無御座候、然ル処此度其御村ニ引越申度放手形相願申ニ付□申候、自分其御村控帳面ニ御書入可被成候、尤貴殿請取手形ヲ以テ此方控帳面消シ可申候、依而為後日之放手形 如件

因州八東郡若桜宿

木地庄屋 太三郎

播州宍粟郡九(公) 文村

以上の文書によって、江州↓因幡↓播州宍粟郡公文村に勘兵衛・忠兵衛・庄左衛門ら移って來たことが明らかになった。一旦公文村に來た忠兵衛は更に公文村から出職という形で森林に向いて木地仕事を行ったと仲藏は話しているから最後は公文村から低い峠を越えた阿舍利地区に尻を据えることになったようである。

この放手形に見られる公文村は本村で、忠兵衛らが移って來たのは、本村から四キロメートル以上山中の小原地区のことである。

六、宍粟、小原地区の成立を考える

小原地区の地名が記録にみえるのは寛文十年(一六七〇)に一人のみの記録がある。

このように早くから注目されていたけれど、木地師たちは他の揖保川の支流の引原川沿いの原村戸倉村一帯を活動地域としていたのだろうか、同じ揖保川沿いの三方川筋の地名が見えるのは「味方木地」だけで細かな場所は不明である。小原は宝永四年

(一七〇七)に二十八人が見られる。説明として六軒百姓と注釈が付いている。(杉本寿氏著書より)小原地区はすでに十八世紀初頭に農業に転職する人が居た。村全体で二十八人中六人が定着して農業が始められた。天明九年(一七八九)また同十年には十八人とあるが、この中には農業をする人は増えていたことと思われる。小原の隣に当たる溝谷の記録は遅くて、小さな峠の向かいの阿舍利地区の方が記録には早く、元文元年(一七三六)に十五人とある。氏子駄帳だけに頼りすぎるのは過ちを犯すので詮索はこれくらいで置いて小原・阿舍利・溝谷の定住は十八世紀初頭と考えておきたい。

現在、知りえた古文書によると文政九年(一八二六)戊八月の村明細帳では「私共先祖之義ハ木地屋職人ニ而 山々相回り住居仕候者ニ御座候……」とあり弘化三年(一八三六)五月の訴訟文書には、「私共先祖 年歴不相分 江州より罷越木地挽職之透ニ少々宛、地平ニシテ住勝手宣敷候ニ付、業雜事(穀)等少々宛仕候、取相応之実候ニ付農業好敷思付 少々宛年々開発仕、自然ト百姓ニ似寄候渡世」(村明細帳)とあり、前出の宝永四年の氏子狩帳にある二十八名、小原六軒百姓を見ても、十八世紀初頭には小原には農業者が生まれていた。しかもこのときから一人前の百姓となり検地も受け高さ十八石二斗二升余の高入れを受けている。実は小原村は村自体が早く高入れを受け、村として認めてくれるように村役人に申し入れていた。村役人が承知せず延び延びになつていたところ、小原村の谷の入り口にある「手洗淵」に鉄

山場が出来て代官の現地視察を受けて、谷奥にある村が見つかり先程の事となつたのである。

七、都多谷の木地屋

集落の成立というほどにはないが、他の例をあげる。これは氏子狩帳には記載されない小椋家がある。山崎町(旧葛沢村)の谷奥の「上ノ」地区にある。これは播磨と因幡との関係を示すものである。享保二年(一七一七)のことで、因州山の木地屋九兵衛は、次の文書を残している。

相究申一札之事

私儀只今迄 因州山ニ住居申候得共、最早山伐木末罷成、不勝手ニ付、当地河原山江、宿替仕度奉存……(下略)と上ノ村庄屋・年寄・惣百姓に申し出ている。実は木地師が住むのは最初ではなく、都多中ノ村真言宗徳王寺の過去帳には元禄・宝永年間に利(理)兵衛一家、正徳・享保年間には善助一家が河原山の野野角山に住んでいた。こうみると九兵衛の享保年と善助一家の享保年とは同期で互いに連絡があつたとしても不思議



ではない。

それはさて置き、九兵衛の「相究申一札之事」の約定を見る
と、

①百姓衆の発炭稼ぎの邪魔に成らないこと。邪魔とは炭の用材
を切らないこと。発炭（八端）作りには使わない古木・大木だ
けとし、また大切な御用木（松・桧・榎・樅・真木）は一本に
ても損じない。

②河原山口に作り手のない田、少々あつて村中で未進分を請け
負っているのを木地師九兵衛が引き継ぐこと。

③九兵衛は此処に屋敷を造り、田作りをして木地作りをする。
これは作り手の無い土地に多分土質がよからう筈は無いが、他
国から来た木地師には定住するのには好条件といわねばならな
い。

④木地道具の轆轤一挺につき、式拾五匁（御公儀運上銀）を納
めること。

⑤役人は勿論、百姓衆に不義・無礼・我がままを言わないこ
と。

⑥宗旨は当地の真言宗徳王寺の旦那になること。

九兵衛が上ノ村と結んだ約定は以上であるが、条件はそんなに
無理なものではないようである。ただ、文書を読んで理解できな
い点があるのは木地師が御城米十石、鉄山米十石を差し出すとい
う項目で合計式拾石を差し出すと理解してよいのかと疑問があ
る。このことは時間をかけて解決したい。

八、宍粟の木地製品の流通を考える

森林に住んで不自由な暮らしに堪えて、彼らが営々と造った椀
と杓子の類はどんな経路を経て消費者に届いたのだろうか。

宍粟の製品はどんな経路を運ばれたかは興味がある。この疑問
に答える資料はいまのところ見当たらない。人々の聞き伝えでは
但馬の竹田に送られたとも言うが確かな記録はない。今から僅か
な記録を追ってみた。

まず誰でも気の付くことに山崎の商人に塗師屋という屋号の家
があるが、此処に善蔵（鉄山師）を営んでいた。実際に塗師屋で
あつた証拠は見られない。思うに以前には塗師屋を営んでいたの
か、屋号から見て決して
思い過ごしではなからう。
塗師屋と鉄山師とは別段
仕事上関係はないが、鉄
山請負には随分資本が必
要だから塗師屋で得た金
を鉄山資本に転用したの
かと考えられる。僅かに
知りえた資料の『山崎地
詰帳』の古検の欄に慶安
三年（一六五〇）と考え
られる北魚町の所に塗師
屋長蔵なる者が、間口六

旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします



神姫観光

〒671-2576 兵庫県宍粟市山崎町鹿沢68
（神姫バス山崎待合所内）
TEL(0790)62-7588
FAX(0790)62-7589

ただし江波峠を越えて牛馬の背による荷物は江波の西の若杉峠（岡山県）を経て大茅野↓津山へのルートもあった。

また、山陰道を但馬↓丹波↓京都↓日野という陸路運搬もあったから山崎町に集荷された数量はそんなに多量でなかったかも知れない。日野町は滋賀県日野町のこと、中世から木地を取り扱っており、近世では近江商人としていろいろな商品も取り扱っている。ここでは日野塗りとしての名がある。製品は膳や椀であるが各地に漆器製造業者が増加すると日野漆器の勢いが見栄えのしない商品（日野椀）は人の好みにあわなくなってきたといわれる。三方谷、西谷、奥谷からの製品も但馬竹田に送ったと伝承している老人もあることから、仲買人が集荷して山陰街道を経て日野に送っていたかもしれない。今のところ筆者には判らない。

九、千町村の繁栄

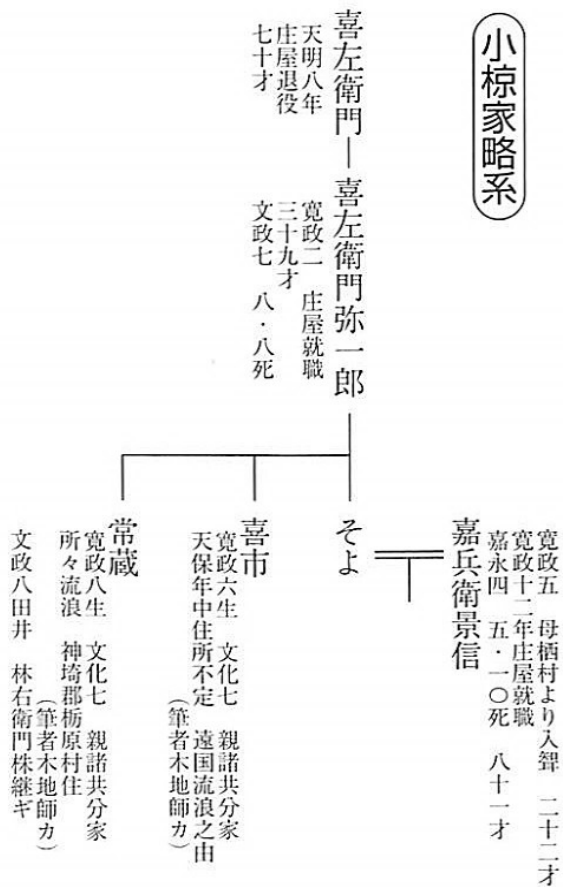
また推測も含めて考えられることは三方川の支流「草木川」の源流に近い山間に「千町」という集落がある。山深い地域であるにもかかわらず相当な経済力と支配力を所有した人が住んでいた。ここは山（全くの余談だが、風力発電の話のある山）一つ越せばさきに述べた竹田に通じている。木地製品の仲買人を勤めたのではなからうか。千町村から東北方向にある笠杉山（一〇三二メートル）と段ヶ峰（二一〇二メートル）中間の鞍部（八九二メートル）を越すと田路川（円山川支流）に出るから竹田集落へは容易に行くことが出来る。この仮説は次の文章によって可成の

正確性を持つものと自負している。

嘉永五年（一八五〇）因州組木地師、年行事、小椋冬柏の覚書によると、「藤左衛門儀播州千丁木地師嘉左衛門名跡」又、万延二年（一八六一）には沢次郎の名がみえる。嘉左衛門の子、所々流浪などと記されている二人があるが木地師として所々にて木地稼ぎをしていたのだろうか。

小椋家の家系には流浪の後、神崎郡柝原村に居住とされた名は、常蔵となつていているが、柝原村は前記の段ヶ峰の東斜面で、千町峠を越えればすぐで、柝原の名は木地師が好みの、よい素材の柝ノ木の多い事による地名なので居を定めたと解することが出来る。筆者らが調査した次の系譜は、前述の小椋冬柏の覚書と付合しない部分もあり、首肯できる部分もあり、参考までに記しておく。

小椋家略系



明治二十七年（宍粟からの開拓団）

篠津原野への挑戦

鎌田裕明

一 はじめに

常時、十余人のメンバーが机を囲んでいる古文書学習会の席で、世話役の横井先生が「北海道の新篠津村に『宍粟』という大字の所がある。そこには明治の中頃、宍粟郡から移住した人の子孫が住んでおられるらしい。」という話をされ、併せて石狩川中流域の宍粟という地名の記された新篠津村の五万分の一の地図を回覧されました（註1）。この日から凡そ二ヶ月後、横井時成先生、柳田弘先生、そして私の三人が新篠津村を訪ねることになりました。

この旅で私達は、石狩川河口から三十キロ、札幌から北東三十キロの地点にある新篠津村を取り巻く自然に出会い、村政を担っている加賀谷村長をはじめ幹部職員（註2）に親しく『宍粟』と村の歴史、村の概要、行政の課題などを聞くことが出来たのは大きな幸せでありました。この時、私達にとって最大のインパクトは、次の二つでした。一つは開拓農民の課題は石狩川の年二回の氾濫（四、五月の雪解けによるものと、九月の台風によるもの）の被害を少なく済ますこと。二つ目は、泥炭を中心とした不毛の土地を農業適地に改良すること。

関係の文献を読み進むにつれ北海道開拓の歴史が日本の近代に持つ意味（註3）は当然として、開拓を担った人たちの厳しい暮らしのありようにうたれると共に、宍粟の先人たちの不屈のチャレンジ精神にふれることが出来たのは、これまた有り難いことでした。

以下に於いては、入植した人たちの栄光と挫折を直接歩き、見触れた感動の上に記し、この人たちの歴史的な偉業をまとめてみたいと思います。

なお、この報告は財団法人山崎本多藩記念館事業の一環としてまとめた『石狩平野・篠津原野への挑戦』の一部を抄出したものです。詳しくは元のものをお読みいただければ幸いです。

二 宍粟郡からの移住

明治二十七年四月、宍粟郡に於いて、北海道で拓地殖民事業を興すことを目的とし、有志数名が資金を拠出して株式会社組織されました（註4）。資金援助者については、『老松酒造二百年史』（註5）に「河瀬、香山両氏が中心となり北海道拓殖組合宍粟農場の計画が立てられるに際しては、遠大な理想に生きようとする同志に多大の資金的、精神的の応援をし道素自身現地まで足を運んだものであった。」と記されています。

北海道拓殖組合宍粟農場は社長河瀬勇次郎、農場長香山昇、取締役生沢庄左衛門、吉野平次郎、黒田重太郎らで四月十一日山崎を出発し、鉄道で青森まで、十七日に汽船で室蘭に、十九日に炭鉄鉄道で札幌に着きました。「自分たちは、ただちに土地貸し下

げ事務を道庁の担当と詰め、篠津屯田兵村の一家を借り、生活に必要な米、味噌などを整えて、船で小樽に着く宍粟からの移住者の受け入れに備えた。」と河瀬勇次郎は記しています。(註6)

以下、北海道開発計画と人々の移住はどのような目的ですめられたのかを、国と移住者の二つの観点から整理し、ついで、移住者の暮らしについて新篠津村の自然との関わりで見ることになります。

(1) 国の北海道開発政策

ア 屯田兵制度 略

イ 北海道土地払い下げ規則による

国は開発が所期の予想を遙かに下回るのを厳しく受けとめ、民間活力の導入路線を打ち出すこととなりました。一八八六(明治十九)年に制定された「土地払い下げ規則」は一人につき十萬坪(三十三万平方メートル)以内の土地を無償で貸し下げ、開墾に成功した場合は千坪一円で払い下げる。貸付期間は十萬坪以下十年以内、六萬坪以下は八年以内、三萬坪以下は三年以内、六千坪以下四年以内、宅地や海産干場は三年以内、牧場は十年以内でした(註7)。

土地払い下げの実施のためには全道の測量と区画割が必要でした。篠津原野の区画割が出来たのは一八九三(明治二十六)年、道庁が移民募集を全国に告示したのは一八九四(明治二十七)年一月でした。この年四月、早くも宍粟からの移住が開始されたのです。八月には日清戦争が始まっています。アジアの大国・清を

相手とする開戦前の社会的緊張が高まっている中で北海道移住の壮挙でした。それにしても移住集団の河瀬勇次郎たちの情報をつかむ早さと、参加した人たちの果敢な決断には驚きを禁じ得ません。

(2) 移住者の暮らし

ア 宍粟農場の人たち

一八九四(明治二十七)年、河瀬などの努力で篠津原野に百戸分五百町歩の土地貸し下げを得て宍粟からの移住者を中心とする大規模農場が誕生しました。

宍粟農場関係者の入地がは

じまったのは四月、貸し下げ地の引き渡しは五月、この時の移住戸数は十二、宍粟郡内の移住者募集に応じた人たちが中心でした。続いて六月と七月に五戸、八月に二戸、十一月に八戸が移住し初年度は二十七戸(註8)により構成される農場が発足しました。元宍粟自治会に住んだ宍粟籍の人は、先にあげた河瀬(山崎)、生沢(神戸村)香山(揖保郡)、吉野(宍粟)、黒田

呉服とジュエリー

とくさや

本店 本町(さつき通り) 62-1680
咲ランド3F 呉服のとくさや 63-0568
// 2F ジュエリーとくさや 63-0557

(田井村) 各氏の他に、後藤常松(宍粟)、山本只吉(安志村)、千本厩吉(城下村)、河瀬房吉(山崎)、萩村義三郎(宍粟)、横野庄助(宍粟)、古川定八(門前村)、吉田源吉(福知村)、植木ツキ(福地)さんでした(註9)。河瀬勇次郎によれば(註10)この他に、飛石(村名記載なし)、新庄只次郎(船越村)、高嶋松之助(菅野村)さんの名があげられています。

イ 他の入植団体、そして新篠津村の誕生

「貸し下げ規則」の告示に対し一時は出願人が七百に達し、選考は資力に重点を置き、事業計画を持つ会社組織の団体が優先されました。宍粟(貸し下げ地五百町)、大阪(四十町)、福井(二百四十町)、岐阜(七十町)、京都(百五十一町)伊予(面積不詳)などの地縁的結合によってなる団体が入地しました。これらの中で株式会社組織の宍粟は最大手で豊かな人材を持っていた。宍粟農場のリーダーたちは後に村の発展に貢献することとなります。

このように貸し下げられた農場のその後を見ると、大阪は四十町歩の開墾に成功したが一九二八(昭和三)年には当初のメンバーは残っていない。福井は四十六人が入植したが土地を他人に売却したものが出たので貸し下げを解除し、改めて一戸に五町を貸し下げました。岐阜は十余戸の入植であったが大正初期には三戸のみとなっている。伊予は二十数戸入植したが土質が悪かったうえ洪水で被害を受け、離農者が相次ぎ、最後には一戸のみとなりました。

さて、宍粟農場が貸し下げられたのは石狩川沿いの地で船着き場もあり新篠津村発祥の地でした。移住者は二つのタイプがあり、一つは自己資金を持ってきたもの。二つは諸経費を借りて加わった人たちでした。後者のグループは、種や味噌は貸付を受け後で年利二割で返還、開墾料は一反につき二円が支給されました。自己資金を持つ小作人は給与を受けず開墾後に土地を地主と折半することとしていました。後の一九〇三(明治三十六)年河瀬房吉、生沢庄左衛門、黒田重太郎らは小作人に土地を開放しています(註11)。

ここで新篠津村の誕生

について触れておきます。北海道庁の移民募集の告示で急速に人口が増加し始めたこの地域は、篠津村に属し、行政的には江別村の管轄下にあります。その発展の様子は、一八九五(明治二十八)年百六十四世帯、五百三十二人、翌年には三百八十六世帯、千四百四十九人と一年間に千人近くの人口増にも看取されます。

外科・内科

山 中 医 院

院長 山 中 陽 一

山崎町西町・TEL⑥20036

こんな中で新村を作る運動が盛り上がりました。その先頭に立ったのは、宍粟農場の生沢庄左衛門と香山昇、沢田牧場の沢田義信でした。生沢や香山は兵庫県で自治行政を経験していたらしいと『百年史』は記しています。新村分離独立に対して江別村、篠津村屯田兵は村有財産が減るとして大反対でした。いろんな経緯を経て生沢、香山、沢田などの運動が盛り、一八九六（明治二十九）年新篠津村が誕生しました。

このころ、黒田重太郎は自宅を開放して寺子屋式で読み書きを教えました。この自宅は後の新篠津小学校の前身です。また、河瀬房吉は駅通を作って一九一四（大正三）年頃まで十八年の間、地域の交通と通信に尽くしました（註12）。

ウ 「宍粟農場」の実

績

「大農場及び団体移住調査」報告書は、明治二十七年十一月の項で宍粟農場の墾成総坪数五万四千坪、うち播種坪数二万四千六百十九坪、農産物は姉子豆収穫三十石、小豆十五石、粟十五石と記しています。初年度のこ

心のゆとりのおてつだい

安井書店

YASUI BOOKS

TEL (0790) 62-0700
FAX (0790) 62-2117
TEL (0790) 64-2051
FAX (0790) 64-2052

本店
つき通り
ブックランド店
山崎町中井

の収穫は住民を力づけ未来への明るい展望を与えたことと思われ
ます。

エ 暮らしていくうえでの課題

しかし報告書は続けて将来の厳しい課題を次のように記しています。「開墾に取りかかった川の沿岸部は樹林地が多かった。生えてる木が巨大であり加えて熊笹が繁茂しているため、伐木と開墾は共に困難であった。開墾後も根が散らばって立っており馬を用いて耕すことが出来ないため沢山の人力が必要であった。また農場用地は湿地と泥炭地で、十分な排水溝が必要である。更に、泥炭地は肥沃な土を客土しなければ農耕に適さない。」

困難はここに記された以外に現代の私達の感覚からすればもう一つ、決定的なことがあるように思われます。それは宍粟からの移住者にとって初体験の極寒の地であったことです。北海道への奥羽や北陸からの移住者が多いことについて水上交通との関連を指摘する論者もいますが、気候への適応も原因の一つと思われるます。また、旧長州藩主が一八八一（明治十四）年一千余町の払い下げを受け、旧藩士の救済を行っています（註13）。この場合は旧藩の秩序を持ち込んだ開拓で、民間人中心型とは様相が異なっています。

オ 水との戦い

新篠津村の百年史を繙くと始めの五十年間は三年に一度は水害の記事があります。古代中国では、よく川を治めるものは、国を治めると言われてきました。このように村にとって、そして国に

とつても石狩川の治水は大きな課題でした。（水害及び住居確保の困難な様子は省略します）

（3）宍粟農場の試練―大正と昭和前期

このような困難を抱えながら、「宍粟農場」の歴史は続きます。二年後の一八九六（明治二十九）年には兵庫と道内から十七戸、翌年は九戸が増えました。しかし、交通の不便さ、開墾の困難さ、気候の峻厳さから開墾地を離れた人もいて一九〇〇（明治三十三年）年には戸数二十五、開墾地は九十五町歩でした。九十五町歩は困難に耐えて文字通り血と涙と汗で拓かれたものでした。

手元に昭和三十年代の


新篠津村「住宅地図」があります。（註14）宍粟郡出身者の御子孫は一名です。

大正末頃の地図では、河瀬、香山、生沢さんの名が見えます。

明治時代の住宅地図で確認出来た宍粟郡出身者は、十一名でした。

新天地に愛着を感じて住み続ける人々。幾ばく

きれいなカラープリントの店



コーエーカメラ

本店 宍粟市山崎町東鹿沢 26-3 ☎ 62 - 2089
 フリーダイヤル ☎ 0120 - 440 - 990
 F A X 0790 - 62 - 7429
 咲ランド店 T E L 0790 - 63 - 0533

かの蓄えを元に次なる飛躍を願って都市へ転居していく人々。病や災害で志し半ばで不帰の客となられた人々。「住宅地図」はこれらの人々の深い悲しみを湛えているようにも思えます。

一八九四（明治二十七年）年四月、日本が清国と戦端を開き、国際舞台に登場する四ヶ月前、宍粟郡から、青春の夢を大きく掲げ、北の新天地開発の夢を以て入植された十数家族の方々の志は達せられたのでしょうか。その答が「住宅地図」にあるというのでは、あまりにも寂しすぎます。

石狩の原野に振り下ろした鍬の手応えを感じたとき、

堤防に土砂を運んだときの肩の食い込む石の重さをズッシリと

腰に感じたとき、

孫の誕生の泣き声を聞いたとき、

天候に恵まれた年の豊かな収穫のとき、

開拓者の心が燃え、青春が大きく膨らみ、命が輝いたのです。開拓者が途絶えても……次に続く人たちが受け継ぎ、更に開墾地を広げ、更に豊かな土地に改良していくことで、宍粟から移住された方々の志は達せられたと思うのです。

三 おわりに

『石狩平野・篠津原野への挑戦』（以下『本報告』とする）では新篠津村の今日及び可能性について記していますが、スペー

スの関係でこの辺で擱筆します。

この小論の構成と柱については、三人で話し合い、その結果を鎌田がまとめました。資料については横井先生が人脈と情報網を駆使され、原稿の仕上げについては柳田先生の字に強い緻密な知が力となりました。

脱稿して、まだまだ不充分なところも多く、皆さんにも、この報告の仕上げに参加していただければという願いを持ちながら、以下思いつくままに個条書きに記します。

◎北の国との深いおつきあいを。宍粟とゆかりの深い土地が北海道にあるということは、私達の心を躍らせます。姉妹都市とまでいなくても、旅の候補地としてお考えいただければと思います。

新篠津村の役場窓口は、電話0126・57・2111
企画振興課企画係長山田知典さんです。

◎この報告の課題は、

①入植された方の宍粟での様子や、その後について、整理がもう一つであること。

②思いこみによる叙述を点検し、より客観的なものにするこ
と。

◎内容についてお気づきの事や関連する情報があれば、ご遠慮なくお知らせ下さい。

【註】

1 横井時成 北海道「新篠津村」訪問に至までの経緯

2 懇談は一時間半ばかり、新篠津村村長 加賀谷 強、助役 高橋勝治、企画振興課長 東出 勉、企画係長山田知典の皆さん。午後の現地説明は、八十一才の新篠津村老人クラブ連合会長 葛西一雄、山田企画係長さんでした。

3 この意味についての研究視角は二つだと海保嶺夫は述べています。（『北海道の「開拓」と経営』 岩波講座 日本歴史16、1976版 PP180～212）。彼によると一つは、開拓の進展は近代化であり、近代化は進歩であり、国づくりの進捗でもあるとするもの。二つは、開拓が移住民や在地民衆（アイヌ）に何をもたらしたかを踏まえながら資本主義の形成を整理するもの。

このことに関しては、私は一般移住民や在地民衆の視点を大切にしながら夢やあこがれなどのロマンと、精神や意志のようなロゴスが歴史をどう変えていったかを探ることではな
いかと考えています。

封建的規制の比較的弱い新天地で、自律的な生き様Ⅱ禁欲
的自己規制を生活の基本に据えた移住民の生活については
『本報告』を見ていただければと思います。

なお、開拓者たちの禁欲的自己規制については、小室直
樹が、『論理の方法』（東洋経済新報社2003版）の中で
山崎闇齋を論じ、維新の原動力になった志士たちの「行動的
禁欲」P370と、日本資本主義の担い手たちの「行動的禁
欲」P370とを時代のエートスとしていますがこれと通底

するものがあるように感じています。

- 4 『新篠津村百年史』上巻P239 新篠津村村史編纂委員会 平成八年版 以下『百年史』と略する。

株式会社組織については、『庄家文書』の明治二十九年の公私萬用日記の一月一日の年賀状の宛先の中に北海道石狩国石狩郡篠津原野宍粟農場 河瀬勇次郎と香山昇の名があります。庄氏と開拓団宍粟農場の関わりを示すものと考えられ、郡内の支援者のネットワークの上に乗った「宍粟農場」構想でなかったかと考えます。また、明治二十七年の年賀状リストには、吉野平次郎と香山昇の名が見られ、北海道へ行く四ヶ月前に年賀状交換の間柄になっていたと考えられます。

- 5 老松酒造株式会社『老松酒造二百年史』P14

- 6 河瀬勇次郎『北海道移住の実況』私立宍粟郡勸業会雑誌

- P34 発行者 三幡繁蔵 明治二十八版

- 7 『百年史』P233～234

なお、明治二十七年の一円は米価二十キロ相当なので今のお金で九千円相当となります。また日当換算では堤防工事が五十銭なので一万五千円から一万円と推定されます。

払い下げ価格は、一八九七（明治三十）年の貴族院では十町以上の大面積の払い下げを無償としました。これにより開拓が飛躍的に進み、農耕適地の分割が進みました。（旗手勲

『日本資本主義と北海道開拓』P353 岩波講座日本歴史第十六巻）

- 8 『百年史』P239

- 9 宍粟自治会記念誌編纂委員会『一世紀の歩み』P111 昭和六十一版

- 10 河瀬勇次郎『前掲書』P33～35

- 11 『百年史』P239

- 12 『百年史』黒田についてはP228、河瀬についてはP482

- 13 旗手 勲『前掲書』P340

- 14 宍粟自治会記念誌編纂委員会『前掲書』付図

昔楠木、今は乃木

浅田 耕三

乃木將軍は指揮官として有能であったのかどうか、日露戦争ではロシアの守備する旅順要塞にむかって遮二無二突撃し、ついにこれを占領したものの、そのため日本軍は多大の犠牲をはらった。

その將軍乃木の資質について第二次世界大戦後、多くの論者の毀譽褒貶が相次いだ。悪くいう者は、その攻撃の無謀ぶりを非難し、弁護する者は、旅順要塞を十年前の日清戦争の時と同じに考え、ロシア軍が陣地をベトンでおおい固め、空壕までうがって、おまけに機関銃という最新兵器で待ちかまえていることを少しも知らなかった陸軍大本営の無能と怠慢をいいたてる。

そのいずれが正しいのか、軍事専門家ではないからわからない。が、一つはつきり言えることは、軍人は知らず、行政官としての乃木さんはまちがいなく立派であったということ。公平にしてこれ程清廉潔白な役人はそうはいないであろう。

昔、私が子供のころ、カルタに「昔楠木、今は乃木」というよみ札があった。戦前、戦中の皇国日本の少年に読ますカルタで、湊川の決戦にたった六百の小勢で馳せ向かった南朝の忠臣楠木正成と、明治天皇に殉死した乃木さんの忠義ぶりをたたえた文句であるが、このお二人は、その無私無欲さ、精神のいさぎよさにお

いて、たしかに双璧ともいえる史上の人物ではないだろうか。六月に出した自著『求道の梅医』中の「鉄血山ヲ覆イテ」を書いた動機は、台湾総監督時代の乃木さんのその清潔と孤独の陰翳に惹かれたためであった。



『山崎町歴史街道』 (十)

●山崎町の史跡巡りをしませんか●

会報部

三十九 青木銅鐸出土地と青木銅鐸

(1) 銅鐸出土地 (兵庫県指定文化財) 山崎町青木

昭和三十五年十二月、山崎町青木字小谷に於いて、農作業中に得体の知れぬ物が発見されました。それが弥生時代を象徴する貴重な銅鐸でした。

発見場所は、菅野川上流の青木から塩田へ向かう南側の小高い山の斜面で、ブドウ畑開墾中に、青木の故谷林新氏によって発見されました。深さ十数センチの表土直ぐ下の案外浅いところから見つけられたようです。谷林氏の話では、当時はまだ戦後十数年、戦時中は当地の上空をB29爆撃機が旋回していた事もあり、土と笹の根にまみれた得体の知れぬ金属物を見て、一緒にいた作業員共々焼夷弾ではないかと危険を感じ後ずさりした、との事でした。

その後、教育委員会や専門家により大変貴重な銅鐸であることが判明して、現在国の所有物として



山崎歴史郷土館に、通称青木銅鐸と名付け展示してあります。また、その複製品(レプリカ)が姫路の県立歴史博物館にも展示してあります。銅鐸出土地には、兵庫県指定文化財出土地跡の標識板があります。

(2) 青木銅鐸 (兵庫県指定文化財 考古資料)

山崎歴史郷土館展示

青木銅鐸は高さ三一・七センチ、裾開きで円筒形の「身」。身の両側についていた「びれ」。びれから立ち上がった取手形の「ちゅう」で出ています。

また、身の両面が斜格子帯で四こまずつに区画された四区画袈裟文の古式な小型銅鐸です。身の一区画に双様渦巻文が残っており、「ちゅう」の文様には鋸歯文と連続渦巻文が両面違いで見られます。

この銅鐸は今から二千年ほど前の弥生時代に作られた青銅の鋳物ですが、不思議なことに銅鐸は、集落から離れた山や丘の斜面に穴を掘り、横にして埋められ



ているようです。しかも、弥生時代だけから見つかっており、また、弥生時代の終わりと共に姿を消して、弥生文化を象徴する日本特有の器物ということです。

また、何に使われたのかよく分からないということでしたが、現在では、農耕集団が祭祀に用いたのではないかと言われてます。今から二千年前の弥生時代、菅野川流域に住んでいた人々がこの銅鐸の前で、春には豊作を祈念し、秋には収穫を感謝してお祭りをしていたのでしょうか。

ちなみに、宍粟市内の銅鐸出土地は四カ所、①青木銅鐸（山崎町青木）昭和三十五年発掘 ②須賀銅鐸（山崎町須賀沢）寛政二年 ③閨賀銅鐸（一宮町閨賀）明治四十二年 ④千種、銅鐸の破片（千種岩野辺）昭和五十七年銅鐸の破片発見。

事務局だより

宍粟市発足により、山崎郷土研究会でお願いしておりました名誉会長や顧問について、各部長と会長が相談の結果、本年より名誉会長は廃止し、顧問については、一名として運営しようということになりました。

したがって、顧問は従来お願いしておりました文化協会の会長にお願いしようということになり、本年度より宍粟市山崎文化協会会長に就任されました藤井慧乗氏にお願いしましたこと

ろ、快くお引き受けくださいましたのでお知らせします。

一〇六号は新体制の最初の号となりますので、市内で本会のなじみの少ない一宮・波賀・千種の文化協会会長に寄稿をお願いし、組織の拡大を図れるようにしています。各会長さんに心よりお礼を申し上げますと共に、格別のご配慮をお願いいたします。

なお、前号で長井家文書（須賀沢）に見る高瀬舟関係資料の読み出し（一）Ⅱ森本一二会長の続編は、今回紙面の都合で次号に掲載させていただきます。

会員の皆様にも、会員の拡大のため多くの方に入会を勧めさせていただきますようお願いいたします。今までと違い市内の方にも勧めてくださいますようお願いいたします。

春と秋の研修旅行にも参加者が少なくなり難渋しております。皆さんにご協力をお願いします。